

八幡平 後生掛温泉 雪のトレッキング

平成 21 年 2 月 13 日～15 日

5 期、日々好日夫妻 (K、S)、

6 期、MS 氏、MH 1 氏、MH 2 氏

7 期、SM 氏

友人、SS 氏



1、心躍る準備

日々好日先輩から、後生掛温泉湯治宿へのお誘いメールをもらう。年寄りの温泉旅行なら大歓迎、とばかりに気楽に快諾したのだが、インターネットで調べてみると、岩手と秋田の奥深い県境、標高 1,000 ㍎あり、2 月上旬は 2 ㍎以上の雪に閉ざされる。冬の雪山は卒業してから数回スキーに行った程度である。同行者の顔ぶれをよく考えなかったのがいけない。

「大人の休日倶楽部」に入会すると、新幹線も含めて 3 日間乗り放題の切符を入手できるという。早速手続きしたが、どうも出発日には間に合いそうにない。日々好日さんがウルトラ C で切符を購入してくれる。

装備を整えるのも大仕事である。昨年、南極に行った時のオーバーコートを出してみたが、いかにも大袈裟で山登りというスタイルではない。ゴルフに使っているサーモアンダーウェア、ウィンドブレーカーとオーバーズボン、あとはシャツとセーターの重ね着で対応する。スパッツは購入し、スノーシューとステッキは日々好日さんの予備を借用することとする。一応格好はついたが、雪が酷ければ温泉三昧、と気楽に考える。

2、後生掛温泉

後生掛温泉は岩手県と秋田県の県境に広がっている十和田八幡平国立公園のなかにあり、溶岩台地が連なっている八幡平から少し西側に位置している。「海拔 1,000 ㍎、大自然に抱かれ、抜群の環境と優れた温泉の恵み……」要するに人里離れた山奥の温泉である。

東京から東北新幹線で盛岡 (2 時間半)、盛岡からはジーゼル車が走る、いわて銀河鉄道を経て JR 花輪線で鹿角花輪駅 (1 時間半) に着く。鹿角花輪駅から宿のマイクロバスに乗り 40 分で温泉に到着である。ビルが林立する大都会から 5 時間後には雪に覆われた山奥の秘湯に入浴できる。

<2月13日(金)>

3、盛岡駅と盛岡じゃじゃ麺

雨を心配しながら「こまち9号」に乗車、東京駅では半分ほどの客であったが、上野、大宮でほぼ満席となる。金曜日にも拘わらず、旅行客が多い。我々と同類の「大人の休日倶楽部」組か。しかし山登りスタイルはほとんどいない。

スキー組3人は先発している。日々好日夫妻は大宮で乗車してくる。仙台を過ぎると空席が目立つようになる。屋根に雪が残っている盛岡駅に到着、流石に寒い。

今夜の自炊用の食料を調達するために、ケータイで調べた盛岡駅近くのスーパーへ向かう。すぐそこ、というわりにはなかなか見つからない。心配になって街の人に尋ねると、東北弁で教えてくれる。理解できず、聞き直すのも億劫で示された方向に歩いてゆく。

あった！。 イオン系のマックスバリュ、盛岡にふさわしい大型店である。野菜、肉、豆腐、水餃子、コーヒー、お酒等々レジ袋4つ分購入する。ザックを背負い、スノーシューを手に持ち、ねぎが飛び出しているスーパーの袋をさげて再び駅ビルに戻る。

昼食は日々好日夫人推奨の「盛岡じゃじゃ麺」、駅地下街の有名店「小吃店」を求めて北の端から南の端まで、繁華街を闊歩する。こんな格好で歩いているのは盛岡と雖も我々だけである。60代の分別あるおじさん、おばさんであることを忘れて40年前に見事にタイムスリップしている。頭の白さと、ちょっとくたびれた歩き方、登山靴を履いていなければ、ホームレスの集団と見間違えられそうである。

「盛岡じゃじゃ麺」は安くて美味しい。腰のある平打ち麺、具はすりしょうがときゅうり、秘伝の肉味噌のたれがのっついて、よくかきまぜて食べる。ラー油、酢、すりにんにく、一味唐辛子も並んでいる。

固めの麺の歯触りが良い。麺を八割方食べたところで、生玉子を入れて「お願いします」というと、おばちゃんが熱いスープを注いでくれる（「ちーたんたん」の出来上がり）。もう一度違った味の麺を味わうことができる。これが「盛岡じゃじゃ麺」正統食事法である（日々好日夫人談）。中盛りで630円、一度で二度の楽しみ、魅力的である。

4、いわて銀河鉄道、JR花輪線

盛岡の味を満喫して、いわて銀河鉄道に乗る。先発した佐々木さんと合流する。いわて銀河鉄道は好摩駅からJR花輪線に乗り入れている。単線でジーゼル列車が、長閑な田園の中を走ってゆく。地方と雖も最近は新型車両で、社内は綺麗で気持ちが良い。盛岡を出る頃は学生も沢山乗っていたが、次第に少なくなり、温泉へ出かける旅行客ばかりのようである。

MSさんは相席となった、これから結婚式に行くという話好きの中年男性に、ニコニコ笑いながら相槌を打っている。

車窓は雨から雪に変わり、畑地から雪で覆われた森林に変わっている。



5、鹿角花輪駅

鹿角花輪駅はカラフルな新しい駅である。舎内には 日本三大ばやしの一つである、花輪ばやしの写真が所狭し、と飾られている。駅前には列車の動輪と、立派な鶏の銅像が建っている。

宿のマイクロバスが迎えに来ている。町を離れて、雪道を登ってゆく。この道路は八幡平アスピーテラインと称し、八幡平を越えて松尾八幡

平まで続いているのだが、除雪がされているのは後生掛温泉までである。

路肩には雪の壁があり素人の運転ではかなり危険である。九十九折りの山道を登ってゆき、温泉が近づいてくると、数々の積雪である。

6、オンドル部屋と共同浴場

後生掛温泉には、旅館は一軒しかない。普通の旅館に相当する旅館部と、湯治客が長逗留できる湯治村、そして共通の大浴場である温泉保養館がある。建物は増設を繰り返しており迷路のように入り組んでいる。

建物の周りには、湯けむりが上がっていて、硫黄の匂いがする。

後生掛温泉は 300 年の歴史があり、‘オナメ’‘モトメ’の哀しい民話が残っている。東北の人達の農閑期の湯治場として利用されてきた歴史がある。今でも湯治客が長逗留できるように、安価な大部屋があり、共同炊事場が設けられている。鍋釜、食材を持ちこんで宿泊している年寄りがたくさんいる。

我々の部屋はオンドル個室で 6 畳、床下は温泉を使った床暖房で暖かく、部屋の中は半そで、半ズボンでも快適である。荷物を解き、早速入浴する。

温泉保養館は大きな木造の共同浴場である。梁や柱は巨木が使われ、湯舟も大きな一枚板である。大正時代に建造され、今も修理を重ねながら使っているとのことである。

源泉は 88 度、単純泉であるが白く濁っている。7 つのお風呂を楽しむことができる

(神経痛の湯、泥風呂、打たせ湯、箱蒸し風呂、蒸気サウナ、気泡湯、露天風呂)。

50 肩 (年齢詐称?) という日々好日さんは地元の人から泥湯の効用を聴き、入浴法の指導を受けて、泥パックをしている。2 泊 3 日の湯治で、完治を祈る。



風呂から上がって、MS シェフの指導で夕食の支度、借用した大鍋でぐつぐつ煮る。

ビールで乾杯。とにかく、よく食べ、よく飲み、よく喋る。何を食べ何を語ったのか、すっかり忘れてしまってここに記せないのが残念である。いつの間にか、長座布団のような幅の狭い薄布団の上で眠っていた。

<2月14日(土)>

7、スノーシュー

昨夜はかなり激しい雨が降った。建屋の周りの雪も雨で流されている。

入浴して、大広間で朝食をいただく。

フロントで周辺の状況を尋ねると、遊歩道は雪に埋もれていて、歩くのは危険という。後生掛温泉自然研究路のスノートレッキングを楽しみにしていたが、残念である。

とりあえず秋田八幡平スキー場までマイクロバスで送ってもらおう。スキー場入口のレストハウスには、若い人たちが集まっており、スキーやスノーボードを楽しんでいる。若手(?)のSSさんはリフトに乗って、ゲレンデスキーに向かう。我々はテレマークスキーやスノーシューを装着し、リフトに沿って登り始める。



スノーシューは和かんじきの現代版である。アルミ製で軽く、面積も広く新雪に乗っても沈まない。大きな爪がついているので、急坂でも滑らない。踵は固定されておらず、浮くので引きずるように歩くのがコツである。慣れてくると、新雪の中に踏み込みたくなる。

30分くらいを一気に

登り、リフトの終点に着く。

スキー場の反対側に蒸の湯温泉が雪にかすんでみえる。雪に埋もれた車道らしき所を下ってゆく。スノーシューの下りは今一つである。テレマークスキーは圧倒的に早い。



蒸の湯温泉の小屋は閉鎖中である。沢沿いの至る所で温泉が吹き上げている。雪に囲われた大きな露天風呂があり、大量の湯が流れ込んでいる。

地図には、ここから沢沿いに下って地熱発電所へ向かう道があるが、雪に覆われていて発見できない。男どもは挑戦的に道を探すが、日々好日夫人は戻る事を主張、女性は強し!、引き返すこととする。結局、このことが思いがけない幸運をもたらしてくれた。

中略・・・・・・・・???

宿屋の大きなおむすび 2 個と、盛岡で買った水餃子を温める。そして食後のコーヒー。

雪山の中で至福のひと時である。

8、雪の露天風呂

昼食でお腹が満たされると、贅沢な思いが浮かんでくる。温泉に入ろう！

露天風呂までは、雪に埋もれた道を 100 ㍎程も歩かねばならない。着替える場所もない。大いなる勇気がいる。口実がいろいろ出てくる。しかし、我々は「名



大ワンダーフォーゲル部」、困難を乗り越え、意を決して挑戦することとなる。下着一枚（下着を脱いだ人もいる）に、オーバーズボンとウィンドブレーカーをはおって、タオルを握りしめ、雪の中を一目散に露天風呂めがけて走る。残念ながら途中で息切れ、雪に足をとられながら、萎える心を叱咤激励してたどり着く。凍える身体に鞭打って、すっぽんぽんになり、湯に足をつけると、露天風呂には源泉が流れ込んでいて、熱くて入れない。周りの雪を放り込んでやっと入浴、肩まで浸かると余裕が生まれる。サポート兼写真隊に向かってにっこり笑顔で記念撮影。



熱さと湯質なのだろう、肌に刺すような刺激があり、頭は寒風に曝され、気持ちが良い。

雲も薄くなり、青空ものぞいている。眼の下にはせせらぎが流れ、沢辺には温泉が湧き、湯けむりに煙っている。ゆっくりと温まって、小屋に戻る。

帰路は再びスキー場まで戻り、雪で閉ざされた自動車道を下って、後生掛温泉に向かう。スノーシューにも慣れて、所々林の中の新雪をショートカットする。



楽しいスノートレッキングの経験でした。

9、大宴会

大広間での夕食後は、オンドル部屋で大宴会。

アルコール度43度の泡盛をもうせん峠の湧水で割って、飲む。

昨日、今日のエピソード、学生時代のこと、今年の山行計画、子供の事、孫の事、……脈絡のない話が延々と続き、頭の中を通り過ぎていった。

SMさんの緻密な山行計画が、地図の裏に走り書きしてあるが字が踊っていて判読できない。

SMさんのアグレッシブな姿勢に感嘆する。

<2月15日(日)>

10、盛岡冷麺

今朝は雪が舞っている。昨日残した林の中のトレースは、すっかり消されてしまっただろうか。

出発前に最後の入浴。2泊3日で10回以上入浴しただろう。日々好日さんの50肩も心なしか良くなったようである。

雪の降る中、宿のマイクロバスで出発。山道を下った頃には、雨に変わっている。

鹿角花輪駅で帰りの新幹線切符を入手する。日曜日でもあり満席のようである。



盛岡駅で待望の「盛岡冷麺」を食べに行く。日々好日夫人の案内で有名店、「ぴよんぴよん舎」盛岡駅前店へいく。焼き肉と冷麺のセットを注文する。生ビールと焼肉で胃を刺激した後、盛岡冷麺を食す。手打ちの透き通るような麺には腰の強い食感があり、「辛み」とよばれる大根キムチをのせて食べる。通(?)がいうには、盛岡冷麺にはスイカ、とのことだが、今の季節はなしのようである。美味しさで満腹となる。

新幹線を待つ間、駅ビルでコーヒーを飲む。

「盛岡じゃじゃ麺」、「盛岡冷麺」と盛岡のグルメを満喫した旅である。

帰りの新幹線は満席、心地良い疲れでゆっくりと眠る。

11、おわりに

今回の山行は、60歳代向けのゆったりとした温泉と雪山を楽しむという、日々好日さんの緻密な計画で、予定通りであった。雪山40年ぶりの私にも大いに楽しむことができた。

大人の休日倶楽部の割引乗車券を使い、2泊3日の旅行費用は全て、28,000円である。

日々好日夫妻をはじめ、同行して頂いた方々に**感謝、感謝**。

文 MH2

写真提供 SS (HP 管理人)

